

編集後記

アジアモンスーン地帯に位置する我が国では、例年、梅雨明け間際には集中豪雨による被害が生じることが多いのですが、今年は7月上旬に福岡・大分で多数の死傷者が出たのに続いて、下旬には秋田で雄物川が氾濫するなど、異様なパターンでの豪雨災害が連続して発生しました。農地や農業水利施設、林地での被害も32府県で332億円（7/25 農水省）と膨大な規模となっていますので、支援策による一刻も早い復旧を願っています。

この季節になると活躍するのが野菜としての豆類です。「さやいんげん」も、そのひとつで、莢の柔らかい専用品種が用いられます。今回、「いんげん豆新品種の育成」について紹介されていますが、我が国へは17世紀の中頃に中国から隠元禅師によってもたらされたとされています。国内生産の大半を北海道が占め、金時類、手芒類、うずら類、大福類、虎豆類など多種多様です。この「いんげんまめ」とよく混同されるのがフジマメで、我が国では、古くは関西で隠元豆、伊勢では千石豆、岐阜・愛知では万石豆とも呼ばれていました。最近では加賀野菜のひとつ「加賀つるまめ」としても知られています。関西では、このフジマメの若莢を「いんげんまめ」と呼び、本来の「さやいんげん」は、暖地では3回栽培できるとされることから、「さんどまめ」と呼ぶことが多いようです。

今回、このフジマメの種子を譲り受け、菜園に播いてみました。今年の関東は空梅雨で非常に暑く、畑が乾燥していたので芽が出るか心配していたのですが、インド、東南アジア、中国などで広く栽培されていることからわかるように、耐乾性があって高温にも強いようです。その特性をいかんなく発揮、元気に萌芽してぐんぐんと伸び、支柱に巻きついていきます。すぐ隣にはシカクマメも播いたのですが、フジマメの方が生育が早いようです。週末にしか観察できないのですが、先週、圃場に出向いたところ、何本かの株元に白い花が咲いていました。方向は上下が逆さですが、藤そっくりです。なぜ、フジマメという名がついたのか、これを見て良くわかりました。若莢には独特の匂いがあるようですが、食味できるのが楽しみです。

これからの季節、豆類をはじめとする各作物が順調に生育して豊穡の秋を迎えることを期待したいものです。

(矢野 哲男)

発行

公益財団法人 日本豆類協会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13

三会堂ビル4F TEL : 03-5570-0071

FAX : 03-5570-0074

豆 類 時 報

No. 88

2017年9月20日発行

編集

公益財団法人 日本特産農産物協会

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13

三会堂ビル3F TEL : 03-3584-6845

FAX : 03-3584-1757